



TITLE:

<Book Review>David D. Thomas et al, Mon-Khmer Studies I, Saigon : 1964,163p

AUTHOR(S):

三谷, 恭之

---

CITATION:

三谷, 恭之. <Book Review>David D. Thomas et al, Mon-Khmer Studies I, Saigon : 1964,163p. 東南アジア研究 1966, 4(1): 178-178

ISSUE DATE:

1966-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55192>

RIGHT:

して使用し、実際に教室で使用するには、もう少し形のちがった、内容的にも興味の持てるものにした方がよいと思う。あるいは、*Spoken Thai* などで一応基礎的なタイ語をやった者が整理のために本書を使用するのなら、大いに有用であろう。なお、かなり誤植が多く、急いで製本した様な印象を受ける。(桂満希郎)

David D. Thomas et al. *Mon-Khmer Studies I*. Saigon: 1964. 163p.

Linguistic Circle of Saigon といっても一般には知られていないが、本書によると、南ベトナムの Saigon 大学と米国の Summer Institute of Linguistics のメンバーによる研究会であるらしい。本書は、その研究会が1963年秋にユエ (Hue) で行なわれた際に読まれた原稿をまとめた論文集である。著者は、編者として Introduction を書いている米国 North Dakota 大学の David D. Thomas を除いては、John and Elizabeth Banker, John and Carolyn Miller, Richard and Sandra Watson というこれまではほとんど無名であった人たちがばかりである。

本書で扱われている言語は、南ベトナムで話されている3つの少数民族の言語、すなわち Bahnar 語、Brou 語、Pacoh 語であって、いずれも東部モンクメル系統に属する。この系統の言語は、ラオス、ベトナム、カンボジアに様々な種類が分布しており、比較言語学的にクメル語を考えるうえで欠かせないものであるにもかかわらず、事実上ほとんど未開拓のままであった。その意味で本書の出現はまことに喜ばしいことに違いない。ことに、このうちの Brou 語と Pacoh 語は今まで単にその名が知られていただけであった。

もっとも本書からはこれら3つの言語の断片しかわからない。各論文とも記述的な研究であるが、短い論文であるうえ、取上げた問題も方法も異なっていて、全体としてひとつの言語の構造がわかるという体裁のものではないからである。すなわち、Bahnar 語については、(1) Clause Paradigm, (2) Affixation, (3) Reduplication, Brou 語については、(1) Word Classes, (2) Substantive Phrase, Pacoh 語については、(1) Pronouns, (2) Phonemes が、それぞれ述べられている。

本書の主眼とする所はむしろ様々な記述方法の適用

例の提示ということにあるようである。たとえば、Bahnar 語の Clause Paradigm には transformational battery が、Brou 語の Substantive Phrase には tagmemic approach が用いられるという具合に。しかしこの場合、battery とか tagmemic, tagmatic とかいった術語に対して、十分な説明や定義がほしいものである。これらはまだあまり熟していなかったり、学者によって用法が同じでないものだからである。

比較言語学的な論文としては Thomas によるモン・クメル語比較研究の展望があるのみであるが、まさにその中で述べられているように、この系統の言語の比較研究を困難にしている最大の原因は音素論的基礎の欠如である。それは本書の対象となっている言語についてもあてはまることである。

ともあれ、Schmidt より半世紀以上もたった今日ようやく、しかしここ数年来にわかに、モン・クメル語の研究が活発になったことは事実であって、本書もまたそのひとつの現われなのであろう。(三谷恭之)

Udom Warotamasikkhadit. *Thai Syntax: An Outline*. A Dissertation Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Texas. Bangkok: College of Education Prasarnmitr, 1963. v+70p.

タイ人によって書かれたタイ語に関する本というのは、一口に言えば、いかにして正しいタイ語を使用するかという規範的なものがほとんどであった。しかし、最近になって、タイ人の若い学者で、主としてアメリカの記述言語学の方法を身につけ、それでもってタイ語を記述説明して行こうという人達が出て来ている。本書はその代表的なものとといえるであろう。したがって、本書はタイ語の規範を示すものでもないし、これでもってタイ語を勉強しようとしても全く無駄であろう。言いかえれば、「いかにタイ語を使用すべきか?」ということは一応別にして、「タイ語とはどういう構造の言語か?」ということを明らかにしようとするものである。

アメリカの構造言語学においても、従来の方法では説明し切れなかった多くの点を説明することのできる新しい言語理論として現れたのが Noam Chomsky, Emmon Back 等を中心とする Transformation の